あさひ文学

第２０回旭市文化祭参加号
令和６年１１月１日発行

刑部岬

旭市文化協会　文　芸　部

あさひ文学

第二十回旭市文化祭参加号

目　次

災害への備えと訓練を……旭市長　米本　弥一郎……1
香取航空基地①……千葉県議会議員　髙橋　秀典……2
歴史文化の伝承……旭市教育長　向後　依明……3
旭市ふるさと文芸賞……4
「日記」・・・紫式部……旭市文化協会会長　花園　千名美……5
電子図書館に思う……旭市文化協会文芸部長　相沢　弘幸……6
昔の道具　縄ない機械と俵編み……旭市文化協会前文芸部長　花香　竹夫……7
俳句……春蕾俳句会……8
俳句……山火俳句会……11
短歌……真心短歌会……12
俳句……さざなみ俳句会……13

俳　句……椿の会俳句……１９
短　歌……しのび坂短歌会……２２
矢指ヶ浦・旭ヶ浦椎名内海水浴御案内をよむ…東総郷土史研究会　千本松　稔……２５
天保水滸伝の紙芝居……「海への会」　船倉　武夫……27
平均？　ごまかさないで……さざなみ会　相沢　弘幸……28
戦時中のこと……さざなみ会　岡　邦　俊……29
令和六年　桜まつり　十二回詩歌大会……３０
編集後記……３５

表紙の写真　早川　悟

災害への備えと訓練を

旭市長　米本　弥一郎

8月8日午後7時15分に気象庁から南海トラフ地震臨時情報(巨大地震注意)が初めて発表されました。

南海トラフ地震は静岡県の駿河湾から九州東沖に延びる南海トラフで発生が予想されるマグニチュード8～9級の巨大地震で、発災による被害は東日本大震災を大幅に上回ることが想定されています。これまで約90～150年間隔で発生しており、前回は80年前の1944年に昭和東南海地震、2年後の1946年には昭和南海地震が、さらに90年前の1854年に安政東海地震、その32時間後には「稲むらの火」で知られる安政南海地震が発生するなど、東西に地震が分かれる半割れや誘発地震の発生が過去の例からわかっています。

国は、震度6弱以上の激しい揺れや、高さ3メートル以上の津波の恐れがある地域を南海トラフ地震防災対策推進地域に指定しており、その範囲は旭市を含め29都府県707市町村と広範囲にわたります。

今回の発表は、この地震の発生の可能性が平常時より高まっていることに伴うもので、市では災害対応マニュアルに基づき職員が登庁、臨時情報に伴う特別な注意の呼びかけが終了するまでの1週間、防災行政無線やホームページ、SNSで注意喚起を行いました。

また、今回は時を同じくして台風への備えも必要になりました。台風7号への対応は、天候が崩れる前の8月15日午前11時に災害対策本部を設置。同日午後5時から17日までの3日間、避難所4か所を開設し、主に高齢の方など最大266名が避難されました。本市では、その後の台風10号を含め大きな被害はありませんでしたが、全国各地で発生する自然災害に日々の備えと訓練の重要性を改めて認識したところです。

10月27日には、旭文化の杜公園をメイン会場に、旭市総合防災訓練を開催します。今後も、自助、共助、公助の体制の構築とともに、市民の防災意識の向上と

防災行動の促進に努めてまいりますので、市民の皆さんも今一度日頃からの備えをお願いします。

香取航空基地①

千葉県議会議員　髙橋　秀典

毎年お盆の時期になると、私の父の実家の仏壇には、句をしたためた白い布と白黒の古い写真の入った額が飾られます。写真には旧日本海軍の飛行服姿の凛々しい若者の姿があり、古びた布には毛筆で「潔く　散って征こうよ　若櫻」、続けて「天山爆撃隊　上村重美」とあります。

上村さんは、終戦末期、父の実家でともに暮らしていた山口県出身の方で、旧香取海軍航空基地所属の飛行兵でした。終戦も間近の六月、愛機の艦上爆撃機「天山」に搭乗し九十九里の空に散ったと聞いています。

香取海軍航空基地は現在の鎌数工業団地にありました。上空からの写真を見ると、今でも特徴のある十字形の滑走路の跡が確認できます。滑走路跡の一部はブレーキテスト用のサーキットとして活用されています。

私の小学生の頃はまだ工業団地は未整備で、ラジコン飛行機の大きな大会が開かれたり、戦争映画のロケで、南方の基地を模して実物大の零式艦上戦闘機（ゼロ戦）がやってきたりしたのを覚えています。

香取航空基地が完成した頃、日本はミッドウェー作戦での大敗に続く緒戦での航空戦力の壊滅的被害を受け、南方の島々にある飛行場を「不沈空母」として最後の防衛線とすることとしていました。そのためには、残存する飛行隊に新たな飛行兵と航空機を補充し再編成する必要があり、香取航空基地はその編成・訓練のために使われました。

編成基地ですので、南方や全国各地から多くの飛行兵と機体が集まり訓練が行われ、その後戦地に赴いたわけですが、その中のひとつに第二六一海軍航空隊、通称虎部隊がありました。中部太平洋地域における作戦に参加するため、当初鹿児島で結成された虎部隊は、香取基地に転進、昭和二九年二月二十二日には香取基地から硫黄島経由でサイパン島に進出したと記録にあります。

編成基地であった香取基地からは、多くの部隊が前線に飛び立っていきましたが、南方での戦いが劣勢になるに従い、香取航空基地は本土防空の要の基地のひとつとなっていきます。そして、香取基地から初めての特攻作戦へとつながっていきます。（次回へ）

歴史文化の伝承

旭市教育長　向後 依明

本年の十一月七日に、浦賀神社式年神幸祭が斎行されます。

この神幸祭は、江戸時代から続く民俗行事で、数えで十三年に一度、辰年ごとに斎行され、今年で十六回目を迎えます。

また、旭市に伝承される「お浜降り神事」の一つで、平成六年には「房総のお浜降り習俗」として、国が記録作成等の措置を講ずべき、無形の文化財にも選ばれています。

浦賀神社は、かつての東足洗・西足洗・椎名内、四か村の村社で、「野中村誌」によれば、貞和元年（一三四五）に創立され、当初は野中にあったが同年十一月西足洗へ還座したとあります。また、初めは天満天神だったが東足洗浜より大六天が出現し、両社を合体し社号を大六天神と称したと記されています。

その後、明治元年（一八六七）に足洗神社と改称、明治二十二年（一八八九）、四か村が合併し浦賀村となったことから浦賀神社と改称し、現在に至ります。

神幸祭は、浦賀神社が現在の西足洗の地に還座した辰年の十一月七日にちなみ、辰年の同日に開催されてきました。天保十五年（一八四四）の記録には、四か村の村民が参加して、御神輿と供揃の行列が野中浜に下り、潮水を献上し、そこから三村の浜を回り環御したとあり、昭和二十七年（一九五二）は未明から深夜の二日間に渡って行われ、八か所の番所を設け、殿様や使者のやり取り、芸能の披露なども行われました。これに合わせ、二月には神幸巡りという神輿巡行の行事もありました。

現在でも、浦賀神社の氏子である西足洗をはじめ、野中、東足洗、椎名内の八地区が共同で実施しており、ご神体を載せた神輿が、猿田彦や五色旗、大榊などとともに、総勢七十人を超える行列を組んで海岸まで巡行します。

浦賀神社を出発した行列は、途中いくつかの催事場所に立ち寄りながら海岸へと向かい、到着後は神輿が海へ入り祭典は最高潮に達します。

氏神を崇敬して、地域の平安や五穀豊穣、家内安全、商売繁盛を願い、引き継いできた神幸祭、この歴史遺産を後世に語り継ぎ、伝承していくためにも、今回の神幸祭の成功を心からご祈念申し上げます。

旭市ふるさと文芸賞

主催　旭市・旭市教育委員会

課題

一．旭市での日々の生活の中で、体験したことや考えたこと。

二．旭市への思いや愛着が表現されていること。

文芸活動からふるさと旭を再発見し、ふるさとへの関心を深め、郷土愛を育てていくことを目的に、ふるさと旭をテーマとした俳句、短歌、詩、エッセイを市内外から募集したところ、多数の応募がありました。

（十月十五日締め切り）

受賞作品は市ホームページや広報で発表されます。

日記・・・紫式部

文化協会会長　花園　千名美

子供の頃、夏休み帳、冬休み帳の宿題のノートをやたら厚くして、金銀銅ならぬ付箋のようなものを付けられて喜んでいたが、読書感想文だけは「あらすじ」「あとがき」だけでまとめたりと、子供ながらに結構智恵を絞ってやりすごしていた事を思い出した。

今回テーマが決まらずに、悩んでいたところ、大河ドラマ「光る君」を視て、今は亡き林千恵子先生に薦められて読んだ「源氏物語」にもう一度挑戦した。のが間違いだった。

平安時代の位階の多さ、人間関係の複雑なこと等々。読んでいる私の理解力のなさ、眼のせい、体力のせいにして、今更ながらがっかりしてしまいました。

このような複雑な人間関係を書いた紫式部の方に興味を持ち、「紫式部日記」を少し覗いてみた。

私の日記なんて、三日坊主だったり、続けていてもメモ書きになってしまったり、最近認知症防止にと、日付と行動を多少書いたりの小遣い帳のようになってしまっている。そして申し訳のように時折俳句をメモする程度になっている。

「紫式部日記」は、人間関係、特に同じような境遇や立場の女性、例えば清少納言、中将の君、和泉式部、赤染衛門という錚々たる歌人メンバーにも、けっこう辛辣な事を書いている。

日記は誰に見せるものではないが、みられて困るような事も書くものかなあと。自分の日記さえ数年も経つとわからないことが多いのにと疑問に思う。

もしかして紫式部は半分読み物として日記を残したのでは？

書くことってとても大変なのにね。

電子図書館に思う

文芸部長　相沢　弘幸

従来の紙ベースの図書館に対してインターネット経由で書籍を読める電子図書館が出現している。

本年六月時点で県内２３の市町村が電子図書館を導入している。旭市図書館は未導入だが、千葉県東部図書館、隣の銚子市図書館は導入済みである。

利用者にとっては、図書館に出向かなくても貸出し、返却が可能であり、指定の本をダウンロードすれば、いつでもどこでも、その本を読むことができる。パソコンやスマホの画面上で読むことになるので、文字の拡大や読み上げ機能も思いのままである。外国語にも一瞬にして変換が可能であり、語学学習にも有用である。「料理のレシピ」「紙芝居の読み上げ」「音声の出る図鑑」「うごく絵本」などその活用用途は広い。学校に配布されているタブレットと連携を図れば学校現場での活用は種々考えられる。

一方、従来の図書館の持っていた、静粛な佇まい。書架の間を歩きながら背表紙を見て本を探す喜び。借りた本を手に家路へ急ぐ道。ひとり静かにページを繰る愉悦のひととき。これらは電子図書館には望むべくもない。

デジタルの持つ利便性なのか、アナログ的な紙ベースの図書館なのか。幸いにも現時点においては、両者は共存しているようである。市にはデジタルとアナログの二つの図書館があるというスタンスのようである（某市）。利用者はどちらを選んでもいいですよ、ということである。ただ書籍購入費も無尽蔵なわけではなく、今後どの様に推移していくのか、図書館を育んできた文化がどの方向に向かっていくのか、図書館を愛する一人として注視していきたい。

むかしの道具

②縄ない機械と俵編み

前文芸部長　花香　竹夫
（学芸員）

日本は世界の稲作地帯の中では、最も稲ワラを良く利用する風習があり、ワラで作った縄を良く使用した。このワラ縄の使いみちは広く、かや母屋や土壁の骨組みを作る竹を縛ったり、草鞋（草履）を作ったり、時には米俵の梱包には欠かせないものであった。この縄を作る機械は、昭和初期から三十年代にかけて普及している。

一方、俵編みは、米・麦をはじめその他雑穀から炭まで、生活の中心を為すものは殆ど俵によって梱包されていた。この俵編みは、すべて手編みによってなされ、夜業や野良仕事のない雨の日は、寸暇を惜しんで縄ないや俵編みをせねばならなかった。

この縄ない機械と俵編みは、昭和四十年代に入り米俵から紙袋に変わってから、徐々に農家から姿を消している。（この項は令和五年十月三十一日発行のあさひ文学の続編です）

（なわない機械）

（たわらあみ）

俳句

春蕾会

宮負　克己

風あらば遠くに飛ばん花吹雪
昭和の日気紛(きまぐ)れかと夏日の日
時雨けり昔のまゝに蛙鳴く
楽しみは朝顔眺め体操する
知らぬ間に筍伸びて背ほどに

石毛　せつ子

電線を揺らし唸らせ春疾風
青田風水の匂いを込めて過ぐ
自転車も靴も新品青田道
艶やかに葉桜放つ風の色
茶の花や友皆老いて疎遠なり

花香　竹夫

風薫る田面耀う水明かり
三回忌偲ひ静かに聖五月
山襞の幽き月夜の花明り
堰落つる水の豊かさ春来たる
山谷を降りて雪解の川迅し

菅谷　茂穂

畦くずれ水の逃げ行くあばれ梅雨
考の額妻の額見ゆ夏座敷
老鶯の声転げ落つ夕茜
木犀の香持ちくる回覧板
春耕や体の錆に気おくれす

花香　静子

居合わせた人と見送る帰る鳥
引鳥は大ききっかけ髪を切る
忘れても我を忘れじ名草の芽
かき曇り雨に打たれて茄子植える
満水の喜び目高ジグザグと

荒木　悦子

植え終えし広田に映る里明かり
園児らの歌の転るチューリップ
八十路坂越す重き足梅雨の中
母の年遥かに越して雪見酒
ガザの冬路上で生きる家族あり

花香　勝夫

球根を植えては土をさすりたる
しんしんと無音と言う名の雪の音
花丸を印して孫の初暦
手に取れば氷柱も郷のかけらなり
幾千年行方定まぬ芋の露

佐伯　洋子

端居する丸き背中の母まろ寝
昨日より今日の散歩や畔青む
隧道を抜けて際立つ山の藤
梅雨の闇叔母の今際はありがとう
老鶯やまだ現役と谷深し

衣鳩　順一

新米の白粥冷ます生玉子
筒抜けの座敷を渡る秋の風
酔ひ覚ましごくごく甘し寒の水
小春日や杖を両手に三百歩
冬ざれや厨窓より覗く岡

薄田　美津子

悔やむことひとつ葬りて北開く
大き夢そっと打ち明け卒業子
初々しほのと朱を刷く青梅よ
畑仕事諦め雨の芒種かな
顔中を嘴にして子の燕

前田　春代

白き雲ゆっくり写る植田かな
春彼岸霊場印譜軸掛けて
捨てられぬ夫のネクタイ風薫る
青田道日毎根張りを感じさす
らっきょうの甘酢漬けにも流儀あり

阿部　三郎

ガヤガヤと朝のにぎわい北帰行
春二番おらが国では大砂塵
今宵は魔法の刻か桜の宴
青空も水面に映る初燕
古墳に桜が似合う山里や

銀原　俊

夕の風気持ちよきかな田の蛙
土喰んでせっせせっせと舞う燕
何着よう春の天気に問うてみる
春雨を逃れ相合い軒の猫
ご飯だぞ炬燵覗けば子らと猫

藤井　愛子

風にのる仄かな香り庭のバラ
五月晴花を愛でるて癒やされる
桜んぼ頬張る孫のいとおしさ
紫陽花の雨のしずくやキラキラと
甲子園耀く汗に涙する

俳句

山火俳句会

石橋　孝子

裾捲り袖捲りして沢蟹獲る
夢現ラヂオ聞きつつ明け易し
大判の汗拭きタオル二枚持ち
夕立が追ひ掛けて来る西の空
足裏を熱砂の浜で火傷かな

飯田　芙美子

目溢しの莢（さや）の膨らみ豆ご飯
夏シャツの男女手を取り白砂踏む
沖堤に白波上がる月夜かな
松手入庭師楽しげ茶飲み時
空澄みて冬日黄金の色放つ

短歌　真心短歌会

宮負　克己

梅雨明を待ちつゝ眺む夕空に半月出でてあたり明るし
木の間より射す明りのしろくして古代の気吹き草木に恵む
人聞(ひとぎき)に我が健在耳にしてご中元を送り呉ぬ
友呉れし即席スープを作りけり日々用ひて重宝する
木の葉越し朝の光りの強くして今日の暑の思はるる

花香　竹夫

眺めゐる田面戦ぎし涼風に老いの命の潤ひ満つる
亡き妻よわが肩をもむ夢さめし優し面影消えることなく
妻ともに労苦あれども晩年は何事ひとり日々虚しけり
幣立ちて神の息吹か青田風こだまを返す老鶯の声
苔むした墓石に積もる花の屑うららうららと町の新川

俳句

さざなみ俳句会

鈴木　和江

羅に懐紙の厚み確かめり
亡夫と行く旅の約束糸蜻蛉
ふかふかの土を均して夕立過ぐ
夏衣美しき腕のはち切れむ
茅の輪くぐり廻る順序の足形図

諸持　耕太郎

熱戦に水をさしたる夕立かな
泥まみれ球児整列晩夏かな
アスリート一瞬の風パリの夏
武器をすて集ひ競えやパリの夏
歌姫に千のうちわの風おこり

相沢　弘幸

渓流の青葉に遊ぶひのひかり
赤銅に日焼けの漢（をとこ）缶ピース
白馬村夏のシャンツエの空青し
ふるさとの景色丸ごと海鞘（ほや）を食う
星月夜声なき声聞く椰子の島

伊東　禮子

秋刀魚焼くごめんやっぱりこげちゃった
おしろい花誰を待つやら花開く
文化祭しっかりアルトで歌うつもり
きゅうり漬つけもの石に力あり
秋場所や今一番のおたのしみ

石井　敬子

仏桑花(ぶっそうげ)摩文仁の石碑語りけり
オリピアン笑顔弾けし巴里の夏
占領のタラップ降りしサングラス
休耕の蒲の穂をほし祖(おや)の田よ
朧めく夜の帳やものをもふ

石井　孝

『モルダウ』の旋律聞こゆ初夏の夕
喉越しに産地巡らす新茶かな
穏やかな野点の傘に風光る
まほろばや何処に去りし蜃気楼
法要の墓石に寄り来黒揚羽

大後　秀樹

永き日に繕ふ網の長きかな
五月雨や蔓の絡まる廃牛舎
水馬(あめんぼ)のシャールウィダンス　潦(にわたずみ)
短夜や摘みとる茄子の鋏音
湯加減を尋ねし母や夕螢

岡　邦俊

新しき戦前なるや藪枯らし
物差しに母の旧姓アッパッパ
秋晴や薬自慢の四人旅
擦れ違ふデジャブの人や秋遍路
穭穂や倅(せがれ)都会へ行ったきり

岡野　京子

短夜の御伽噺はひとつだけ
五月雨やぬり絵折り紙三姉妹
奉納の笛の調べや蛍舞ふ
日焼けした時代小説父の椅子
信楽の長皿出して初秋刀魚

鎌田　とみ子

林道の隅の敷石苔青し
束の間を闇で乱るる蛍かな
五月雨や白檀香る古書の店
ピィピィと戸袋の底が巣箱かな
茶毘の刻香(かぐわ)し花よはらからに

佐久間　松枝

盆の月赤い尾翼がみ空とぶ
葱坊主揺るること無く空仰ぐ
十薬の白花楚々と藪に咲く
オリンピック泣いて笑って夏深し
病みて娘(こ)と帰る山並雲の峰

高野　一枝

桜樹に蝉の鳴き初む午前四時
岩魚釣り息をひそめて石の影
終わりなき草取り今日も梅雨曇り
短夜の心休まる病みあがり
愛犬の天まで届け額の花

高野　寿美子

卒業生眼にひかる決意見ゆ
風光る新役員の回覧板
新茶くむ遥かな知覧想ひけり
雨の中土手を彩る夏薊
庭石の窪みをはふや青蜥蜴

高野　富子

オリンピックメダルを胸に秋うらら
炎天下未来を夢み球追う子
純白の朝顔石に絡み咲く
夏の川バンジージャンプ大声で
ぶどう棚一粒取りし味見する

滝澤　昇

若駒の夢は世界へ父を追い
短夜や未知との遭遇時間切れ
初夕立石に立つ矢を胸に秘め
秋祭鎮守の森で瞑想す
落葉踏む新聞届く午前四時

並木　紋子

花過ぎて静けさもどる過疎の村
春の風邪煮物の味の定まらず
午後二時の移動スーパー村うらら
夏つばめ滑る如くに沼の上
眼鏡してもやしの髭根とる日永

林　利恵子

カサカサと落葉しとねの猫日和
吾子自慢補助輪さんを卒業す
おむすびと新茶の香り笑顔満つ
夕立や駆け込む軒にもうひとり
風死すや石に意志あり磨崖仏

平山　伸

番屋飯味の染み入るぶり大根
我が校に善意グローブ冬ぬくし
春駒や姉の暮らしは阿蘇麓
二人乗る足漕ぎボート風光る
短夜や姉妹の語りまだ終へず

深堀　和子

風光る岬廻りのコミュニティバス
走り茶や富士に農鳥現るる
檀林に僧のカノンや額の花
茅花流し牛飼いの歌碑なぞりけり
犬吠にジュラ紀の化石夏の雲

松本　祥子

新茶汲む余生未知なる事多し
ほのかなる新茶の香る仏間かな
舷に水かげろふの迷彩画
うぐひすや風の集まる岬道
海士小屋の開け放たれし立夏かな

柳堀　節子

膝癒えてさあ歩き出せ草萌野
新茶汲む湯気の向かうの祖母の笑み
石語る地球の起源炎暑かな
ウラヌスの末裔（すえ）の活躍パリの夏
空高しそこから平和見えますか

吉田　哲子

座の華や曽孫（まご）の誕生淑気かな
金目鯛かたよき石やお食いぞめ
曽孫（まご）を愛で餅肌ぷっくり初節句
短夜や産後のママのおお欠伸
バナナ食ぶ屁つ放り腰の一弁餅

栗栖　峰子

縁石にキラリ蜥蜴の青光る
主（あるじ）なき庭にひそりと草の花
虹色の空のキャンパス夏の夕
実りゆく八萬石は黄金色
寝ころんで二人で探すカシオペア

第４４回オンライン句会

栗栖　峰子
・稲架（はさ）掛けの束を揺らして風過ぐる

相沢　弘幸
・雑踏の駅の角打ち今年酒

並木　綾子
・新涼や絡みし糸のするり抜け

俳句

椿の会

荒木　美枝子

木洩れ日の水輪幾重にあめんぼう
また会釈してしまうような案山子かな
見上げれば誰か呼びたい鱗雲
クルクルと古巣転がる風の中
裏道を祭衣のいそぎ足

渡邊　耕佑

俄か雲江戸風鈴の鈍き音
穂芒の押されて戻る風の道
通り雨夏の匂ひを残し行く
一病を連れて茅の輪を潜りたる
顔洗う蛇口の水に残る夏

花園　千名美

初芝居團十郎の睨み待つ
船頭は野鴨のつがい花筏
見上ぐるはマンタの腹よ夏帽子
呼びかけて亡きこと気づく萩の露
大暮（おおぐれ）や背広選びの孫二十歳

浪川　とし子

秋刀魚の尾整えかぼす添える夕餉
降る如きつくつく法師陽は西に
黒纏ひ往き交ふひとや新盆会
重たげに稲穂色づく日々猛暑
雷鳴の後追ふ豪雨傘あおり

守部　洋子

浜昼顔風荒き日は砂に伏し
引く波の巻き込んで行く晩夏光
櫻貝かざす遠き日見ゆる迄
石一つ拾って帰る秋の浜
万緑やミットのつかむ球の音

高木　健寿

ソーダ水ジャズを奏でる雨の音
心太（ところてん）若木骨折腕しなる
へばりつくヤモリの足や熱帯夜
満ち溢る大利根の水青田波
紫陽花や棟上げ近し空眺む

早川　悟

二才児の雲梯登る春の空
幽学の教への庵黄水仙
ライト向け桜浮かびて押すシャッター
ぶらんこに花の一輪子を待ちて
羽化七分蝉抜け殻の脇にあり

和　日和

初釜の白き指先思い込め
苔むした織部灯籠雪のかさ
傘傾げしぐさも品に春の雨
茶室路光悦垣にすみれ草
千枚田棚田の数の月見なり

伊藤　あき子

紫陽花やあるじなくとも咲き誇る
穏やかな紫陽花見てはあやかれて
紫陽花がみごと咲にて人を待つ
ハチ毒素三回ささされ危険あり
この暑さ気を入れかえてのり越える

宮内　幸平

秋刀魚焼く煙は遥か風に乗り
夏の朝彩とりどりの花をつけ
刈田原野鳥群がる八万石
白鳥の高き鳴き声群れ誘う
散歩道紫陽花眺め川つづみ

高品　彩

夏みかん手作りジャムはほろ苦く
気怠さの残るこの身や今朝の秋
押し出され着地見事や心太
鬼灯を鳴らし少女に戻りけり
女子衆の肩によろめく神輿かな

相沢　弘幸

誘引の棚の真白に梨の花
ポキポキと新茶摘み初む伊豆の山
ボルダリング登る少女よ巴里の夏

短歌

高品　彩

パリに着き努力の力試す時
技は光りてメダルは胸に

短歌

しのび坂短歌会

坂本　昌子

雨風の静まりてゆく庭見れば土に張り付く花びら厚し

沙羅双樹平家の盛衰見つめしか我にもありし盛衰思う

からむ蛇去りて燕は十年も我が家に巣作り幸せ運ぶ

新しき日記帳なり今日からは現実を見んと表紙に書かむ

沙羅双樹の葉裏に潜むカブト虫昨夜の雨に黒光りせむ

藤井　和子

この部屋の雛の華やぎ昨日まで整然として空間寂し

如月の庭に囀る小鳥たち番(つが)いらしきが多く遊べる

音もなく柿の若葉を濡らす雨終日(ひねもす)やまぬ五月朔日

甘茶とう花の香りは薫風となりて届きぬわが窓辺まで

庭畑に蚊帳つり草を抜きおれば幼き日々の遊び思いぬ

増田　満里子

河津桜満開となる帰り道見あげる空に半月淡し
夕暮れに淡き灯りをともすごとハクモクレンの楚々と咲きたる
新緑のあわいに白きハナミズキ風に吹かれて舞い散る夕べ
梅雨入りの間近き里の夕暮れに不如帰鳴く甲高く鳴く
棹の先見あげる空に雲の行く凡(おおよ)そコキアの形しており

仲村　克子

鶯の初音奥より聞こえきて如月の森春の気配す
師の点てる茶はまろやかに身に染みてそこはかとなき威厳伝わる
八十年藪に埋もれしトーチカに日本守りし兵士を想う
空襲の惨劇平和な世に伝う大仏に見る傷の数多(あまた)を
電話より幼馴染の声聞きて他愛無きこと語り合いたる

八木　佐和子

和箪笥に母のぬくもり伝わりて響く取っ手の音の愛おし
十年(とせ)経て三株に増えし堅香子(かたかご)の黄緑の花うつむきて咲く
むらさきの色の気高く清しさよ「都忘れ」は思い出の花
わが海は「日本海ぞ」と育ちしが今太平洋の海に親しむ
能登地震半年を経て訪ねしが街も生家も見る影もなし

加瀬　教子

古希となる顔にほつほつ吹き出物「これもよしか」と若き日想う
満開の桜の庭に夫と食む甘辛団子に花びら散りぬ
母愛でし八重の水仙香しく仏間に活けて心安けく
いつの間に葉のうらに垂る丸い実の稚児百合と呼ぶ名の愛しさよ
駅毎に遅れる列車乗り継ぎて大原までの道のり遠し

矢指ヶ浦・旭ヶ浦椎名内

海水浴御案内をよむ

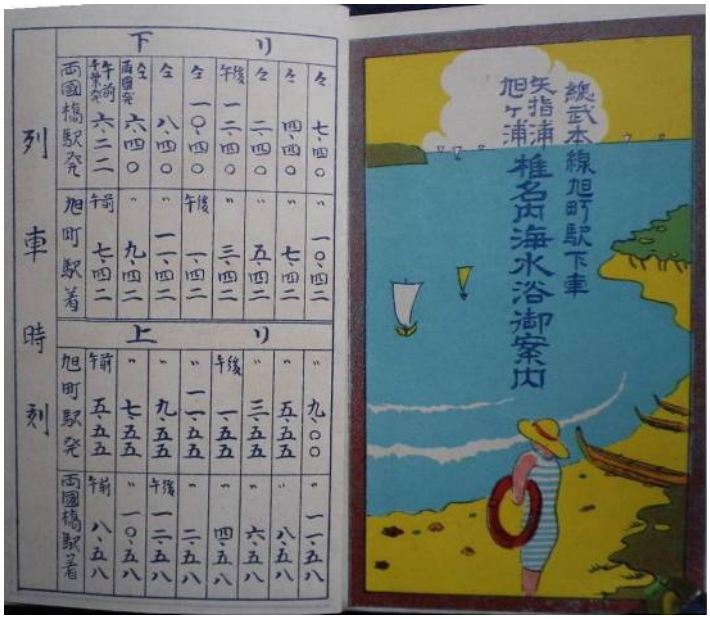
東総郷土史研究会会長　千本松　稔

白砂青松・遠浅の海岸、風光明媚で知られる椎名内矢指ヶ浦海岸は、古くは明治後期から海水浴場として県下有数の場所でした。

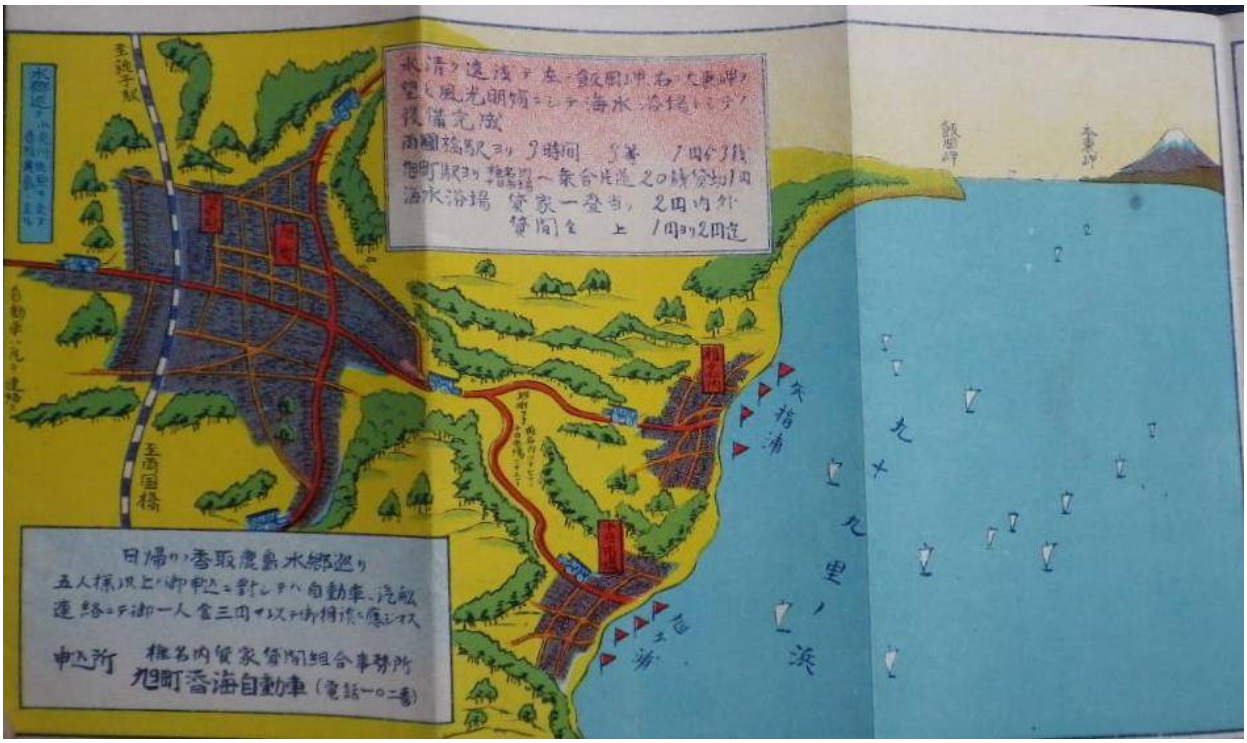
今回ご紹介するのは昭和三十年代に発行された観光パンフレットです。

No.１には両国橋駅～旭町駅迄のダイヤが掲載されています。所要時間約３時間の汽車の旅でした。No.２には絵図（旭町駅～矢指ヶ浦・旭ヶ浦）があります。現在十日市場浜ですが、この絵図には旭ヶ浦の名称になっていることがわかります。No.３には当時の飲食店等の店舗が掲載されています。上段には旭駅周辺の老舗の名前がうかがえます。下段には主に椎名内浜の店舗名が41軒記載されています。特に、飲食店が多く繁盛していたことがわかります。今現在でも営業されている店舗名もあります。

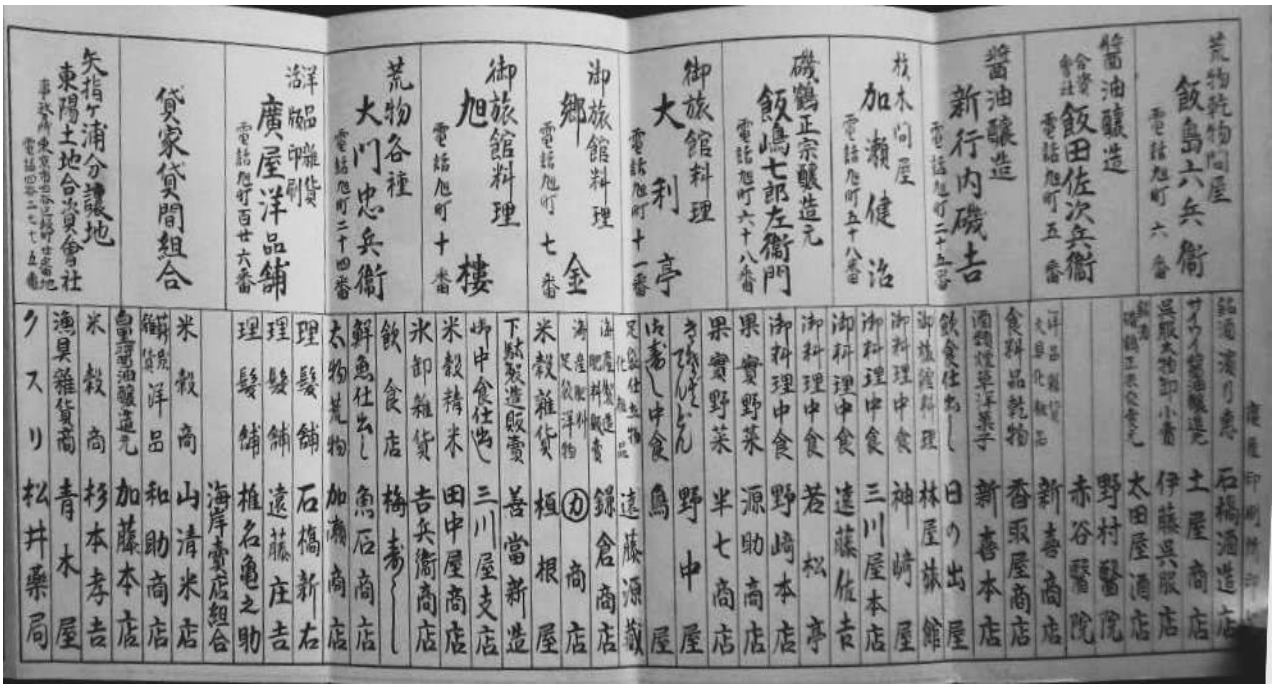
今年の夏も矢指ヶ浦海水浴場は大勢の海水浴客で賑わっています。



ＮＯ１．両国橋駅―旭町駅ダイヤ



NO２．矢指ヶ浦・旭ヶ浦絵図



Ｎｏ３．飲食店　店舗

天保水滸伝の紙芝居

海への会　　船倉武夫

「天保水滸伝」は「利根の川風たもとに入れて、月に竿さす高瀬舟・・・わたしゃ九十九里荒浜育ち、と云うて鰯の子ではない」の名調子で始まります。しかしながら展開していく内容は真実と駆け離れ、かたや繁蔵は悲劇の美形の若親分、こなた助五郎は十手をかさに悪事を重ねる老親分。勧善懲悪のイメージを定着させたのが任侠時代劇映画。その証拠として配役例を紹介します。

○「天保水滸伝」昭和３４年
　助五郎：近衛十四郎、繁蔵：高田幸吉

○「天保遊侠伝・代官所破り」昭和４０年
　助五郎：遠藤太津朗、繁蔵：大川橋蔵

○「天保水滸伝・大原幽学」昭和５１年
　助五郎：進藤英太郎、繁蔵：市川右太衛門

玉崎神社に石碑が建ち、子どもから「川端のじっちゃん」と慕われ、地元では「畳の上で穏やかに亡くなった侠客」と敬意をもって伝わっています。

さて、伊藤實氏は「飯岡助五郎・真説天保水滸伝、崙書房、昭和５３」の執筆動機を尋ねられるたび、「飯岡小の新任教員として遠足の引率したとき、『どっから来たの？』と聞かれ、子どもが無邪気に『飯岡！』と答えたら、『悪人の孫か』と返され、イラつくとともに、玉崎神社の門前生れなのに、反論できない自分に歯がゆく調べ出した」。

ところで、東庄町観光大使・玉川奈々福さんが浪曲「風説天保水滸伝・飯岡助五郎の義侠」を上演しています。長年、軽視されてきた大時化エピソードをきちんと取り上げた作品は味わい深いです！

この感動をばねに、「飯岡大漁節」を狂言回しとして、紙芝居「天保水滸伝外伝・助五郎と大漁節」をようやく完成！紙芝居劇団ふくが上演中です。

おまけ情報。「我らの波止、昭和７年、中村六三郎作」の後、激しい海岸浸食に見舞われたとき、松の木の丸太を枠杭にして玉崎石を詰めた助五郎が施工した堤防が偶然発見されました。木と石はコンクリートより耐久性がかなり劣ると推測されていたのに、一世紀以上経ってもしっかり残存、当時の人々の祈りと護岸技術の高さを示す証拠ですね。

平均？　ごまかさないで

さざなみ会　相沢　弘幸

平均について考えてみる。

１００と０の中間は５０であることは分かる。では、例えば１００点の子が４人、０点の子が１人の場合はどうであろうか。クラスの平均は合計点４００点を５人で割って８０点となる。これは単純平均とは違って加重平均と言われている。単なる数値の単純平均とは違ってより実情を表す平均と言える。

一九九六年に銚子無線局が廃局された。廃局理由のひとつに、銚子局の送信機の設備は長崎局より古く、長崎局を存続し銚子局は廃局とし、海岸局一局体制とする旨が提案された。その理由としたのが前述の平均値である。単純平均であった。調べてみると銚子局の主力波のＪＣＳの送信機は数年前に更改され新しかったのである。加重平均をとると銚子局と長崎局はほぼ変わらなかったのである。これには、会社側も慌てた。廃局理由の根拠のひとつが崩れ去ってしまったのである。

銚子無線局には、地元銚子の人のみならず、関東、東北、北海道、東海、北陸地方の出身者が多く、専門知識（無線通信士・無線技術士）を身につけ奉職していた。正当な理由で廃局されるなら、あるいは経営陣が来銚して「経営判断」を言ってくれるなら、容認されたかも知れない。

その後、銚子無線局に働く多くの者が裁判所に「廃局の不当性」を提訴したのは周知の通りである。

最後に、この問題はどうでしょうか。

Ａ地点からＢ地点へ車で往復しました。往路は時速６０キロで、帰りは４０キロで帰ってきました。平均時速は何キロでしょうか。（答え　４８キロ）

戦時中のこと

さざなみ会　岡　邦俊

病室には近しい人達が集まり、その方との最後の別れの時を過ごしていた。看護師が「わかりますか？お名前を言えますか？」と問いかけた。すると「加山雄三です」と答えが返ってきた。しばらくの沈黙の後、病室内は泣き笑いに包まれたという。

その方とは「昭和の爆笑王」と言われた落語家の初代・林家三平さんです。54歳で早世された三平さん。

戦時中は学徒動員で徴兵され、戦争末期には九十九里浜に配備されていました。本土決戦に備え陣地や地下トンネルを作る土木作業に従事。米軍が上陸して来た場合には、火薬を背負って突撃する肉弾特攻要員でした。この時の体験、そして東京大空襲で家族のほとんどを失った海老名香葉子さんとの結婚が、戦争の対極にある「笑い」の道に彼を邁進させたのでしょうか。普及したテレビのお笑いブームの中心的存在として、「どうもすいません」「よし子さん」等のギャグを連発。家庭に元気と明るさを届けてくれました。

九十九里浜と言えば私の亡くなった父母も旭生まれですので、米軍が上陸していたら無事ではすまなかったでしょう。昭和四年生まれの父は、十三歳の時の軍事教練中にドーリットル空襲（犬吠埼沖の空母より発艦した米軍爆撃機による日本初空襲）の航空機を見ました。級友が「あの黒い飛行機は何でありますか？」と教官に聞いたところ、「わが軍の新型機である」と答えたそうです。父からは「もっこ担ぎが重くて大変だったこと」「米軍の艦載機に機銃掃射をされたこと」等の戦中体験を聞きました。いま思えば、父母ともっと話をしておけば良かったと悔やまれます。世界から戦争が無くなる日は来るのでしょうか。

十六の父の八月松根油

大空襲逃れし雛を飾る母

酔芙蓉白いままです無言館

第二十八回袋公園桜まつり
第十二回詩歌大会受賞作品

旭市長賞（俳句）

花散るや白寿の母の髪飾り　旭市　岡　邦俊

旭市議会議長賞（俳句）

吾子の名を違へる母や花朧　匝瑳市　大後　秀樹

旭市教育長賞（短歌）

ピカピカのランドセル背に弾む足
母の手を取り桜指差す　旭市　高品　綾子

旭市文化協会長賞(俳句)

皺の手に花びらつつみ花おしむ　旭市　髙野　寿美子

桜まつり実行委員会長賞（川柳）

入社した次の日退社初ざくら　旭市　岡野　京子

優秀賞（俳句の部）

散りてなを花のひとひら彷徨（さまよひ）し　旭市　けいこ

少年の釣糸垂らし花の池　旭市　飯田　芙美子

花冷えや飢えに苦しむガザの子よ　旭市　薄田　美津子

夕桜橋の袂の影二つ　旭市　森川　静江

朝ざくら鳥語に応え池二周　旭市　深堀　和子

優秀賞（短歌の部）

枝離れ土に届かぬ花びらの
　たまゆらにして命なりけり　旭市　潮　万太

桜蕊降る遊歩道
　ヒョイと首出し亀が横切る　旭市　神崎　三枝子

優秀賞（川柳の部）

人生の旅の桜は八分咲き　匝瑳市　荒木　美枝子

子どもの部入賞作品

優秀作品　俳句

嚶鳴小二年　ト　モ

さくらってももいろいっぱい木にいっぱい

横浜市立獅子ヶ谷小三年　江口　莉花

こいのぼりそらでわらうよいつだって

三川小五年　和田　麗

チアダンスこころとともにおどりだす

三川小五年　渡辺　結夏

春色の桜といっしょにおにごっこ

嚶鳴小六年　相澤　栞愛

立ち漕ぎの風で飛んでく春の花

優秀作品　短歌

三川小二年　栗林　向日葵

こうえんでたくさんのさくらを見ていたら
はるの音がくきこえてきたよ

優秀作品　川柳

三川小二年　平野　結月

さくらの木いつからはるとまちぼうけ

佳作（俳句）

横浜市三ツ池幼稚園めろん組　えぐち　さき

こいのぼりそらですいすいさくらちらちら

三川小二年　はなわ　みり

はるかぜがはこぶさくらにさようなら

三川小三年　関根　杏莉

青空にきれいにおよぐこいのぼり

三川小三年　岩瀬　柚南

あおぞらとぐんぐんのぼるこいのぼり

三川小四年　高野　あつと

つぼみからさくらさいたよ入学式

三川小五年　伊藤　樹希

花びらは皆笑顔にするおまじない

三川小五年　加藤　倖太

ひらひらと花びら落ちてじゅうたんに

三川小六年　宮内　葵唯

桜の花池にうかんで桜船

佳作（短歌）

三川小六年　限界オタク

大きな桜の木に春風ふけば
ふわっとまい上がる花びらたち

佳作（川柳）

三川小六年　プリリン

春の日にねころび見ていた桜の木

特別寄稿作品

旭市文化協会会長

花園　千名美

桜(はな)は二分裾おさえつつ池の端
ブルーシート固き蕾の桜(はな)の宴
朝まだき清掃の人桜(はな)の池
夜半の雨桜蘂(しべ)だけ残る朝
天空にあしらひの雲桜かな

旭市文化協会文芸部長

相沢　弘幸

東国の空と遊べよ初桜
チアダンスブーツに光る花の雨
古の龍のゆらゆら花時雨
枝先を離れし花や宵灯
飛花落花散り急ぐなと云ふ勿れ

旭市観光物産協会事務局長

水野　竜也

雨に散る花絵巻の上の笑顔かな
待ちわびた声を包む満開の花

旭市観光物産協会

鈴木　宏江

打たれつも頬ゆるみけり桜雨
重き雲桜に触れんと使者送り
揺らめくや青ぞら花びら水鏡

旭市観光物産協会

鈴木　知会

添い寝して眺める我が子愛おしや
我が子見て癒しをもらい遅刻する
ビール飲みお腹いっぱいたぬき腹
雨が降る知らせ届けるつばめたち
寝る前にカエルの合唱眠れない

編集後記

童謡「里の秋」は戦時中「星月夜」の題で発表されました。歌詞の３番、４番は当時の戦意高揚を反映して「国を護る」という歌詞となっています。戦争が終わり、４番は削除され３番は、父親が無事に帰ってくる事を願う歌詞へと変更となり、曲が付けられ、現在の「里の秋」となっています。

本年六月文化協会顧問の篠塚益治氏が逝去されました。文化協会そして文芸部への多大なる貢献に感謝します。氏が還ってくることはありませんが、氏が心血を注いだ協会を守り、発展させていくことが求められています。

文芸部長　相澤　弘幸

あさひ文学
第二十回旭市文化祭　参加号

発　行　旭市文化協会　文芸部
発行日　令和六年十一月一日
編　集　相澤　弘幸

連絡先　〒二八九―二六〇四
旭市高生四九〇―九
相澤　弘幸　方
電　話　０４７９―５５―６１１６
Ｆａｘ　０４７９―５５―６１１６
携　帯　０９０-４１２３-１８６２